河出文庫

占いミステリー傑作選

星　新一　他

河出書房新社

kawade bunko

占いミステリー傑作選

◈

著者　星　新一他

一九八九年四月二五日　初版印刷
一九八九年五月　二　日　初版発行

発行者　清水勝
発行所　河出書房新社
㊥151　東京都渋谷区千駄ヶ谷二-三十二-二
☎〇三-四〇四-八六一一（編集）
〇三-四〇四-一二〇一（営業）
振替口座（東京）〇-一〇八〇二

デザイン　粟津潔

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

©1989 Printed in Japan

ISBN4-309-40238-0

占いミステリー傑作選

星　新一　他

河出書房新社

目次

家捜し　高木彬光　七
当たらぬも八卦　阿刀田高　二五
夢と対策　星新一　五三
腎臓プール　都筑道夫　五九
共喰い　小松左京　一〇三
黙って坐れば　半村良　一五三
死の札の女　黒岩重吾　一六三
ヨギガンジーの予言　泡坂妻夫　二〇一
解説　新保博久　二三九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

占いミステリー傑作選

家（いえ）捜し

高木彬光

最近、私は結婚後十六年目で、十回目の移転を決心して、のべ七十軒近くの家を見てまわった。
関心のない人にはわからないだろうが、新聞に出ている不動産の三行広告には、ずいぶんいかがわしいのがまじっている。
「出た！」 幽霊が……。
「新同様」 老女の厚化粧。
「手入不要」 薪（まき）にするには……。
「築五年」 仲人口（なこうど）は倍に聞け。
「豪美邸」 まるい卵も切りようで四角。
「帰国投売」 十三所帯の間借人が残る。
「地百付」 メートル法厳守。
「駅五分」 自動車で……。
等、等、等で、実物を見ているうちに、ためいきの出てくる家が大半だった。
もちろん、全部の広告が誇大広告とはいえないだろう。私の見た家が、運悪く、そんなものば

かりだったのかもしれないが、こっちは、前の家の引き渡し期日が切迫しているために、血眼になって、条件にかないそうな家は、一軒のこらず見てまわらねばならなかったので、こういうことになったのである。

なかには、ほんとうの「幽霊」家屋もあった。広告でこれはと思って調べてみると、そういう家は実在していないのである。

なんのため、広告料をはらってまで、架空の家を宣伝するのかと、私は最初不思議に思った。しかし、一部の業者では、こういうおとり広告は、常套手段となっているらしい。

お客が、これは掘出し物だと思って飛びつくと、

「あいにく、この家はきょうきまりまして、手金がはいったところでございますが、こちらの物件はいかがでございましょう」

といって、別の「豪美邸」をすすめてくる。こうして、十人のお客を吸いよせ、そのうち一人でも取引きがまとまれば、結構商売になるという作戦らしい。

それはともかく、一日九時間も車に乗り続けて、十軒ぐらいの家を見て歩くのは、何日も連続すると、大変な重労働になってくる。それに花嫁一人に仲人十人で、周旋屋が変わって、同じ家へ案内されることも、二回や三回ではなかった。

しまいには、私の頭の中の印象もごっちゃになってきた。問題にならない家は、片っぱしから忘れるようにしているのだが、甲の家の土地に、乙の家の一階があり、その上に丙の家の二階がのっている――というような錯覚を起こすことは、珍しくもなくなりだした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それでも、そのなかの一軒だけは、とくにきわだった印象を残している。場所も正確にはおぼえていない。永福町から西永福のあたりの道は、何十度往復したかわからないから、そのへんだということはわかるが、周旋屋にもう一度案内してもらわないかぎり、一人ではたどりつく自信がない。

人間というものは、誰でも自分勝手なものだが、家の売買にもそういう性格はあらわれる。自分の家を見たいというお客があると、

「前もって、電話をかけてからにしてもらいたい」

とつっぱねるくせ、自分が他人の家を見るときには、むこうの都合など考えない。そういうわけで、私はこの奇妙な家に、突然飛びこんでいったのである。

それはとうてい住めそうな家ではなかった。もちろん買う気にもなれなかった。「新同様」「手入不要」の「豪美邸」だが、塀は半分で切れていた。あとからくっつけたらしい半独立家屋が、道路に面した境界線すれすれまで、のさばり出ていた。そこを建て増したときの持ち主は、これを運転手の住居にしていたのかと思われた。

いわゆる外まわりを見たとき、私はとても話にならないと思った。ただ、略図を見ると全部洋間だということだし、どういう家か、中を見ておきたいという好奇心も湧いたので、靴をぬいで上がりこんだのである。

一歩、足をふみいれたときには、ぞっと寒気がするようだった。まるで底知れない洞窟へはいって行くときのような気持ちだった。

洋間といえば、われわれ、いや不動産業者の観念でも、応接のセットなり、デスクなり、椅子などをおいた部屋ということになっている。ところがこの家の洋間というのは、床の間なり押入れのついていない部屋という意味らしかった。

いくつかの部屋には、あとから入れたらしい赤茶けた畳がしいてあり、いくつかの部屋は物置き同然だった。窓があるのかないのか、まるで日のあたらないような部屋もあった。片隅の部屋の扉をあけたとき、私はちょっとぎくりとした。

六十二、三と思われる女がひとり、むこうをむいて、わずかの日ざしの中にすわっていたのだが、その小柄な体は最初の一瞥では、猿か何か、人間に似た動物が着物を着て、うずくまっているように見えたのだった。

「失礼します」

とことわって、私たちはその部屋の中へふみこんだが、その女は、こちらをふりむこうともしなかった。横から私はその女の顔をのぞきこんだが、右の額から頬にかけては大きな火傷のあとがあった。私たちの侵入を無視するように、その眼は手にした針からはなれず、その手は一秒も絶えまなく、美しい模様を編み出していた。毛糸の球が、何かの意志を持っているように、ころころ転がった。

この部屋を出て、二階へ上がったとき、私は廊下で一人の若い女にぶつかった。

二十二ぐらいの眼の大きい、赤みをおびた髪の持ち主だった。私の顔を見たときには、びっくりしたように身をひいたが、家を売ろうとする人間は、買おうとするお客に対して、どうしても

一種の劣等コンプレックスを感じるものなのだ。私は別に、その態度を不思議にも思わなかった。

しかし、私が二階の部屋の一つにはいって、窓から庭をながめていたとき、この女はまた、私の跡を追うように中へはいって来た。そして、

「先生、高木先生」

と、私の名前を呼んだのである。

私もそのときはびっくりした。こうして、家を見て歩くときは、いちいち名刺を出しはしない。私の側の周旋業者は、富森和男という三十前の青年だが、いわゆる「縁結び」が内定するまでは、こちらの素性は、相手方の業者に打ち明けないのが習慣なのだ。この女が、私の名前まで知っているのは、ほかの理由からとしか思えなかったのである。

「あなたは？」

「夏子、和田夏子と申します」

「どこでお目にかかりましたかね」

「祇園クラブでございます」

私も今度はなるほどと思った。祇園クラブといえば銀座でも一流の会員制のバーである。私は会員ではないが、人といっしょにときどき出かけることだから、何十人という女の一人ぐらいが、私の顔を見おぼえていても、別に不思議もないことだった。

「これはあなたのお家ですか？」

「はい、お気にめしますでしょうか？」

私もちょっと返事に困った。住む気は最初からなかったが、面とむかって、そう言いきるのも少しつらかった。それに買う気がない以上、持ち主に対して、家の欠点をならべたてるのは、なんとなく気のひけるものである。

「そうですね。もう一度、家相や何かを調べてみて、それからご返事いたします」

と、私は言葉を濁した。

「先生、先生は占いを信じておいでになりますか？」

「そうです。それで今度も、駒場の家から方角をはかって、北か西か――ということになるんです」

「やっぱり……」

周旋屋たちがはいって来たので、私たちの会話はちょっととぎれた。

「先生、先生はこの家をお買いにならなければいけません。それが先生の運命です」

数分後に、この女は一歩ふみ出すと、何か思いつめたような断固とした調子で言ったのである。

「運命……」

私は思わず苦笑いした。私は運命論者だから、この言葉も好んで使うが、こんなときに、こんな場所で、ほとんど見ず知らずの女から、こんなせりふをあびせられようとは、予想もしていなかったのである。

「ほほう、あなたも占いをやるんですか」

「いいえ、わたくしはなんにもわかりませんけれども、わたくしの叔父がその道ではたいへんな

名人なんです。大阪の坂田玉堂（さかたぎょくどう）をご存じでいらっしゃいますか？」

「知りませんね」

私は首をふった。占いのほうでは、自称名人は、それこそ数えきれないくらいいる。そういう内幕まで知りぬいている私は、突然こんなことを言いだされても、信用する気にはなれなかったのだ。

むこうのほうでは、富森和男が困ったような顔をして、しきりにこちらに眼くばせしていた。こうして何日もいっしょに歩いていることだから、彼の気持ちはすぐにこちらに伝わってくる。早く切り上げようというサインなのだ。彼は私が占いに弱いことを知っているだけに、おそらく気が気でなかったのだろう。

「それじゃあ失礼。私たちは、これからもう二軒ほど見てこなくっちゃいけないから」

「もう、お帰りになりますの？」

夏子は未練たっぷりだった。玄関先まで送ってくると、靴をはこうとした私の腕をとらえて、

「先生はかならずこの家をお買いになります。二、三日中にきっと証拠をお見せしますから」

と、自信をこめて言いきった。

「まあ、ご縁がありましたなら」

横から富森和男が、私のかわりに答えた。

むこうの側の周旋業者とわかれて、車へ乗ってから、私たち二人は顔を見あわせてためいきをついた。

「先生、先生はあの子をご存じなんですか」
「バーの子らしい。こっちは、おぼえていないけれども」
「そうですか……すこし、頭に来ているんじゃないですか？」
私がちょっと黙っていると、富森和男はせきこんで言葉を続けてきた。
「先生、この家だけはだめですよ。われわれ業者の眼から見ると、家はとりこわしてしまって、更地（さらち）として売るか、それとも建売り住宅を作るか、どっちかしか手がないんです。それにしたところで、土地だけの値段としても高すぎますよ」
「そうだねえ。こっちがどんな物好きでも、まさか、あの家には住めないよ」
私は笑って、この家の話はそれで打ち切ってしまった。

ところが、富森和男のほうは、よくよく心配だったのだろう。その翌日には、この家について、いろいろ調査したといって電話をかけてくれた。
それによると、この家はもとある男爵家の別宅だったらしい。あの老女は、その愛人で、男爵の死後、この家をもらったらしいのだが、戦時中に空襲で、顔と肩のあたりに大火傷を負い、奇跡的に命を取りとめたというのである。
当時は、彼女も四十代だったから、女の命ともいうべき顔に、これだけの傷痕（きずあと）を残したということは、やはり身を刻むような苦痛だったろう。それからすこし頭がおかしくなって、家をほとんど出ないという話も、なるほどとうなずけることだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com